

號四十三百二第

# 神聖なる勞働

# 統一

# 佛教と婦人の修養 國民教育と日蓮主義

▲混亂せる現代思想に最高指針を與ふるものは法華經也  
 ▲文明人は最高の思想に接觸するを要す  
 ▲吾人は文明人にして法華經は最高の思想也  
 ▲然らば則ち文明人たる吾人は本書を讀まざる可らず

文學博士 三宅雄次郎君序  
 大僧 正本 多日 生師

## 法華經講義

特價金三圓  
 郵稅十六錢

▲文明人の誇りは財にあらず金にあらず洗練せる思想と高潔なる人格を具ふるに在り須らく第一の重寶として本書を備へよ  
 ▲本書の再版將に賣切れんとす 此機を逸して千歳悔ゆる勿れ

發行所

東京淺草北濱島町  
(振替東京一二一九)

統一團

▲法華經は健全なる第三文明を産み出すべき大なる力也▼

海軍少將 佐藤鐵太郎

蒙古襲來と日蓮上人  
三上義徹

日蓮上人と婦人  
柴田一能

佛教と道德  
井村日威

▲友に與へて信仰を勧むるの書▼

大僧正 本多日 生

子爵 五島盛光

△再版將に賣切れんとす△

# 縮妙法華經並開結

第壹種 紙裝 正價金貳拾錢 郵税金四錢  
 第貳種 布裝 天金 正價金拾五錢 郵税金六錢  
 第參種 皮裝 三方金 正價金八十錢 郵税金六錢

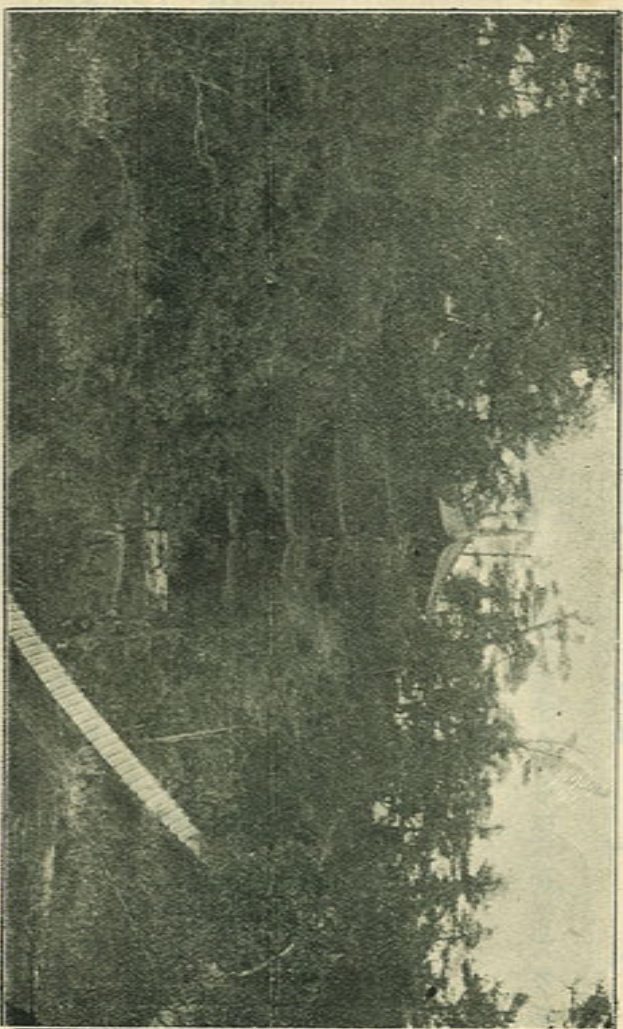
▲法華經は天地法界の秘藏、世界群籍の帝王、亞細亞文明の中樞、佛教教觀の實歸、思想統一の最高指針なり、現代思想界の紛亂其極に達し、結歸する處を知らざるに當りては、須らく法華經の研鑽を奨勵せざるべからず、然るに世流布の經典其類多しと雖も、或は其價貴く、携帶に不便に、或は文字細微に過くる等、求道の士をして満足せしむるものなし、いま本書は此等の不利不便を除き、菊半截判として携帶を便にし且其價を廉にし以て汎く一般に供給し本經の普及を圖らんとするもの、既に初版三千部を頒布し終れり、依てこゝに再版印行したれば一刻も早く座右に供へられよ

△文明人は最高の思想に接觸するに在り、法華經は最高の思想也、我等は何事を措いても本書を讀まざる可らず、本書を備へざるは文明人としての恥也

東京市淺草區北清島町十四番地

統 一 團

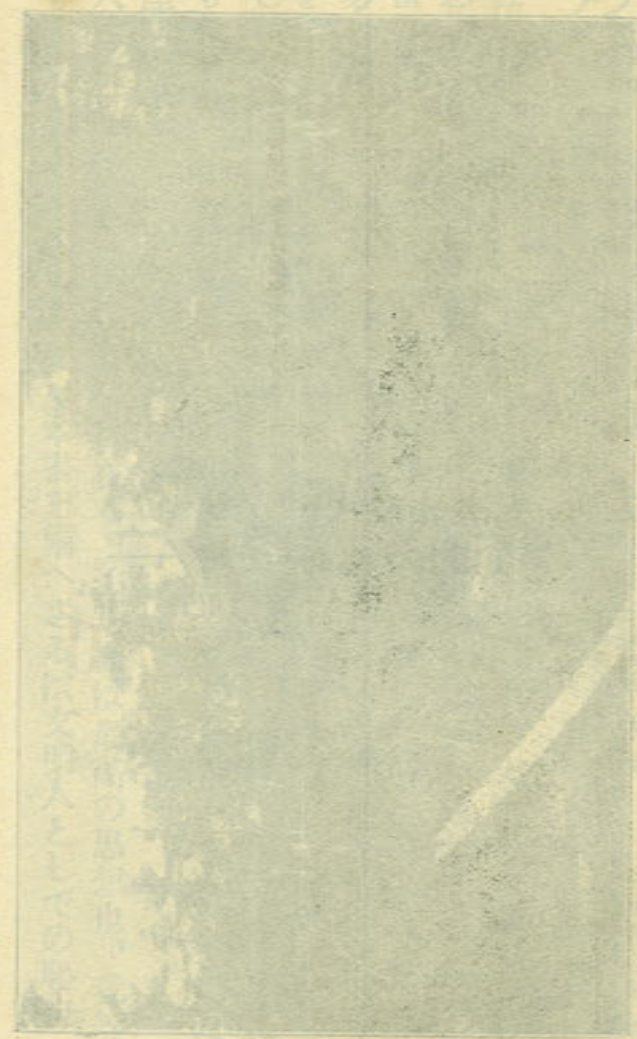
振替口座東京一二一九番



塔 重 五 寺 口 龍 州 相

新編 妙

本法華經  
卷第一  
觀世音菩薩普門品  
第六



東京市立中央図書館蔵

# 蒙古襲來と日蓮上人

今を去る六百三十四年の昔、龜山天皇の御宇文永五年正月、元の忽必烈は使者を我國に遣はして臣奉じよと逼つた。しかも、その書辭文章威嚇無禮を極めて居つたので、我國は斷然之を斥けて何等の返牒をも與へなかつた。斯くて忽必烈は、終に兵力を以て侵略の舉を企て、文永十一年十月二十日、戦艦を率ゐて對馬の伏須浦を襲ひ來つた。當時沿海防備の任務に當りて居つた武士は少數であつたけれども、何れも死力を盡して國難に殉じたがために、神州の蠻土は微塵だも汚さるゝことなくしテ勝を告げた。

是より先、日蓮上人は日本の國勢及思想の潮流を大觀し、必ず外寇の襲來すべき所以を叙して、國民的思想統一の急を叫び、雄大な立正安國論を草して當路者を警め、自から鎌倉の街頭に立つて熱辯を振ひ、國難浪治の根本政策を發表せられ、人心の歸向を示された。即ち文永五年十月十一日北條時宗に與ふる書に

(1) 謹令言上候。抑正月十八日西戎大蒙古國驛狀到來。日蓮先年集諸經要文勸之如立正安國論少不違音合。

當日蓮上人一分知未萌故也中略 速調伏蒙古國人而令安泰我國給  
かゝる意味の警告伏を北條時宗及良觀等の十一人に送つて反省自覺を促がした。當時生き佛と崇められて居つた極樂寺の良觀に與ふる書には

就西戎大蒙古國簡牒事鎌倉殿其外令進書狀候。日蓮去文應元年之比勸申如立正安國論毫末計不相違之候。此事如何。長老忍性遠齋嘲哂之心早令歸日蓮房給。とあるを見て、上人がいかに思想統一の問題と蒙古襲來の國難に全力を傾注せられて居つたか解る。されば上人の精神の動く所は國家と國民との指導に存するので、始めより法と國との事業に殉せんとして立たれたのである。故に弟子檀那中御書に

就大蒙古國簡牒到來以一通書狀方々令申候。定而日蓮弟子檀那流罪死罪一定耳。少莫驚之。方々強言

不及申是併而強毒之故也。日蓮所令庶幾候。各各可有用心。少莫憶妻子眷屬。莫恐權威。今度切生死之縛令遂備果給。

と、上人は門弟と共に身を堵して國防上の政策を立てられた、上人の警訓、今尙ほ渡瀾として聲あり誰れか感服せざるものやある、  
 次で蒙古の軍勢は文永の敗戦以來、日本再征を斷策し、後宇多天皇の弘安四年五月、その船艦三千五百艘と軍兵十萬餘騎、我が博多灣に來寇した、我軍攻勢を執つて防戦すること五十餘日、彼我對峙のありさまにて何時決すべしとも見えざりしが、神人の憤り烈しく、七月晦日の夜半より東北の大風候に吹き起つて、玄海灘の浪一時に連捲き、賊船漂蕩して覆没破壊し、即ち國に冠なす十餘萬の蒙古の軍勢、海の深所と消えて残るは唯だ三人であつた、蓋し元寇の役、正しく國家存亡の候るゝ所國を擧つて防備の決意を要するるのであるが、日蓮上人は既に他國使道の困難あるを察知し、強烈なる絶料を以て上下に自覺を求むること急であつた、即ち蒙古襲來の論斷を下した文中には

「又去年の四月八日に平左衛門尉に對面の時、蒙古國は何比かよせ候べきと問ふに、答て云く經文は月日をささず、但し天眼いかり頻りなり、今年をばすくべからず申したりさ」(法蓮抄(論道文二六九))

「小蒙古人寄來大日本國之事」(小蒙古御書(論道文二〇五五))

# 佛教と婦人の修養

大僧正 本 多 日 生

婦人に關する問題は、世界の二大問題の一と稱せられて居る。而して之に就ては、婦人自身の書いたものも澤山あるが未だ調ふたものはない、婦人は感情的でありますからどうしても公平を保つと云ふことは六ヶ敷い、又男子の方も女子に對して一種の感情を持つて見る人が多い、一體男子は女子を愛するものである、女子其ものは本質として可愛らしきものかどうかはわかりませぬが、少なくとも男の目を通ふして見たる女は可愛らしきものである、隨つて女に嫌らわれる様なことは言ひたくない、そこで男の書く議論に於ても公平が保たれ難いのである、又昔の偉磊い人々の中には女にこり／＼したと云ふ様な人も甚だ多い様でありまして、昔から女子問題を書いた人は澤山あるが、多く

新の如く國家問題を提げて天下に號令し、天業を發揮するに努力せられた、さうして一面には國家の物興運動に障礙を與ふるや否やは、之を根本的に思想上より批判し、漫りに自我主義に因はれて共存生活の本義を廣みするものあらば、政治家なりとも宗教家なりとも、片端より何の用給もあらばこそ、息も付かせぬほどに強き叱責を加へた、しかも是れ愛國の光輝する能はざるものがあるからである

「此二十餘年の間、私には晝夜弟子等に歎き申し、公けには度々申せし事也、一切の大事の中には國の亡るが第一の大事にて候也」(蒙古御書(論道文一三二八))

「但國をたすけんがため生國の恩を報ぜんと申せしを御用ひなからんこそ本意にあらざるに、あまつさへ召し出して法華經の第五の卷を懐中せるを取いだしてさんざんにさいなみ」(撰時抄(論道文一二四三))

かゝる迫害多難の間に、なほ悦んで國運發展の根本政策を叫んだので、この宏遠なる思想と雄大な事業に對して、徹底的に理解するを要する日蓮上人は限られたる形式教團の尊崇人物でない、先づ始めに、大日本帝國及び國民全部の尊敬し渴仰すべき一大偉人である、宇宙を體現したる上人の宣言に聽かば

「日蓮は他れの宗の元祖にもあらず。又未業にもあらず」(妙法上人消息(論道文一四二八))

いまや帝國の地位内外多事なるの秋、國難と日蓮主義の關係に就て深く省察するの急たるを認むるのである

は道徳家とか宗教家であります、ところがこれ等の人達に運悪く人格の整ふた善い婦人が當らなかつたと見へて何れも女子をほめて居らない、孔子様や孟子の夫人も大分能くなかつたと見え、學者は始終本ばかり見て居つて芝居にも連れて行ねばよい著作なども買ふて呉れぬ、そこで練君の方では喜ばない、隨つて心よい待遇もなかつたと見える、それが爲か多く女子の事は良くは書いてない、又西洋の方でもアリストートル、プラトーン杯は、女子は厄介者だとまで書いて居ります、羅馬の法律でも随分ひどく書いてある、キリスト教は比較的公平に見たのでありますが、それでもイブと云ふ女のすゝめてアダムが本實を取てそれが罪の原となつたことに就て女子を罪の根元なりと云つた

人もある、日本も昔は大層よろしい、伊弉諾伊弉册の二尊の事は色々かいてありすが、夫婦の關係や男女の關係は公平に見て居ります、中古武士道が起つて以來、女を低く解釋して參つた、佛教は女子に對して最も公平に見て居るのであります、僧侶の中には女にこり／＼して發心した人が多かつた爲めか、女の悪い方面のみを拾ひ出して外面如菩薩内心如夜叉と云ふやうな事を言つて居りますけれども、之はその僧侶の見方が悪いので、決して佛教が斯かる見方を極めて居るのではありません、佛教には公平に説いてあります、日本で女子問題を解決するのは確かに佛教に限ると信じます、西洋では女子の地位を高めたのは基督教であります、故に女子の味方は東西ともに宗教であると云ふ事は動かぬ事實であります

さて女子問題の判断の標準に就て、尤も公平に考へまするに、大體に於て左の四點であります

- (1) 天然(母)、(2) 歴史(分業)、(3) 科學(生理)、(4) 人生(慰安)の各方面から考察して見ねばならぬと思ひます

整理に當る爲め洗濯に行くのである、若しも爺さんが横着をして二束の柴を刈る力があるのに一束で歸つて来たなら、婆さんは不服を言ふてもよいが、今の新婦人杯の様に、男が勞働に勵むを指して女の職業を奪ふたと云ふは大なる間違である、男と女とが相談をして仕事の取換をやつても差支はなからうが、假りに男が賛成したとしてもそれは婦人の方が損が行くであらうと思ふ、力仕事は女には出來ぬ

(3) 科學に就て考ふれば生理上身體の組織が男子と女子とは違ふて居る、男女の身體を比較して見ると、どうしても女は男に及ばない、英國人ヘッケルと云ふ人が、女の美點を數へて女犬の方が獵犬として役に立つたと云つたが是れは決して眞理でない、食ひ合ひをすると、女犬は直ぐキャン／＼云ふて逃げて仕舞ふ、どうしても女の方が弱い、男の力と女の力とを比ぶれば女の方が三分の一少ない、力を出す筋肉が男は多い、故に男は筋が表に表れて居ますが、女は出て居らない又身體の目方が男よりも五キロ(約一貫三百五十匁)は

(1) 天然と云ふは男と女とは天然の職分が定まつて生れて居るのであつて、男がよいとか女がよいとか云ふても人の力で如何することも出來ない、女は天然に母となるべき職分を有つて居る、女子は妻としてよりも母としての徳が人生に光を放つのである、夫に對して妻としての働が百分の二十か三十ならば、母として子に對する方が七十も八十もある、母としての女子に對しては如何なる英雄豪傑も頭を下げねばならぬ、之は女子の天職として絶待の價値を示めして居る點である如何に身分の高い偉人でも、お母さんには頭を下げられる、之が女子の天然の職分より来る權威である、

(2) 歴史に就て考へますれば男女の分業でありまして男は力仕事を引受け、女は力のいらぬ仕事を引受け行くと云ふことが、人類歴史上に分かれて居る事實である、我國のお伽噺に「爺さんは山に柴刈に婆さんは川に洗濯に」と云ふことがあります、此は歴史的の分業を明白に言顯した意味深き教訓であります、爺さんは自分の全力を擧げて勞働に従事し、婆さんは家内の軽い、又機氣が男より弱い、講演杯を聞いてさきにあくびをするのは女である、それから頭の方であります、女は頭蓋骨が小さい、男は文明と共に發達して大きくなつて居りますが、女は昔の女も今の女も文明人の女も殆んど變りがない、それから腦の働さ具合であるが、人の高等感情即ち高尚な道理を考へたり、道德的作用を起すことは前頭部即ち腦の前の方が働くので、おいしい物を食べたいとか睡たいとか云ふ劣等感情は後頭部が働くのであるが、男は前頭部の血管が太くて其方へ血が澤山にめぐり、女の方は後頭部の方へ血のめぐりが多い様に出來て居るのである、これも必要の上から云ふ風に出來て居るので、自然はチャント程よく拵へて居るのであります、女子は大體に於て身體の組織が子供を生むことの爲めに作られて居るそれ故に子供を生む必要の爲めに女子の凡ての組織が出來て居ると云ふてよいのである、男にも乳はあるが女子の様に發達せぬ、イクラ新婦人と云ふても丈も低くからうし、乳も大きく發達して居ることであらう

(4) 人生に就ての考へてあるが之にも種々なる問題があるであらうけれども、夫婦になると云ふことが人生の根本である、男は女を好む、女は男がすきであると言ふことは偽なき事實である、そこで寄合ふて家庭を作り、夫婦と成つて子を生むのが人生である、人が子を生まなくれば人生もなく社會もなく、人間と云ふものは凡てなくなつて仕舞ふて、獅子や熊の世界となつて仕舞ふのである、兎に角男女が寄合ふて一家を作る場合に於ては、男は命がけの仕事を受けて之を成し遂げ、女子は慰安者になつて、男子の疲勞を慰めて行くと云ふが大體の組み立ててはあるまいか、然るに女かふくれ面をして不平を言ふて居るならば、女子の天職を知らぬものと云ふべきである、女は常にニコニコして人生の慰安者たるの自分を盡すべきである、この天然、歴史、科學、人生の四つの點から考へて見れば大體女子問題は解決し得らるゝのである

明治天皇の御製に

正しくも生ひ茂らせよをしえくさ

居る、子供が病氣に罹れば自分の愛も忘れて、何等の不平等もなく一心に看護する其愛の精神は神や佛の心を代表して居るものと言はねばならぬ、父親も子を愛するが成るべく手数のかゝらぬ大きな子供を連れ歩く位であつて、母親は厄介な小さな子供をより能く愛する此點に於て女子は人生に道德の根本を教へて居るとも云へるのである

先帝陛下の御製に

たらちねの庭のおしえはせまけれど

ひろき世に立つ基とはなれ

母親は大した學者でなくとも、其母親の教へた小さな教が根本となつて、世界に雄飛する大人物を造り出すのである、こゝが婦人の天職の勝れたる所であつて又婦人の大なる慰めである

第二の長所は慈善性である、子に對する愛情を移して、社會の爲めに憐むべき人を救ふ考となつて顯はるのである、併し女は其困まつて居る有様を直接見せないと思ひが薄い、是は女の弱點であつて、男の方は

をとこおみな道の分ちて

とありますが、男女各其道を分ちて本分を守つて行くやう教育すべきを示されたので、男は男らしく、女は女らしく教育して行かねばならぬ、以上の四點を標準として研究して見ますると、其處に女の長所と短所と云ふことが明かになつて来ります、男子も随分短所があります、女は短所を短所として聞かせても中々承服しないものである、それが女の尤も大なる短所であり、故に昔から女には親切な注告をしない人が多いことになつて居る、而しながら短所は短所とし、長所は長所として之を發揮せなければなりません、學問上數學の眞理として一に二を加ふれば三に成ると言ふことは争ふことは出来ませんが、前に申した四點は皆眞理であつて之を否定することは出来ないのであります、故にこの眞理に基いて長所と短所とを見れば、女子の長所としては

第一には母の情であります、子を愛する母の心には少しも自分勝手な心がなく、全く犧牲の精神に充ちて

見せないでも話をすれば分るが、女はそれでは感じが起り難い、自分の子でも膝の上で乳を吞ませなければ可愛い事を感じない、男は里子にでも出したならば餘計に其子を不感に思ふが、女は里子が歸つて来た時に可愛がらぬ人がある、負傷兵や貧民の困窮の状態を話しても感じが少ないが、實際の有様を見せれば、一邊に同情して仕舞ふのである、此慈善の性を啓發さへすれば非常に強大なる慈善心となるのである、此慈善心が發達すれば剛情の弊がなくなる、女子は一體に剛情を張りたがるものであるが、慈善心が發達すれば自然に無くなつて来るのである

第三の長所は優雅性である、女子はやさしい性質をもつて居る、家庭や世の中にしとやかな氣分を湛はすは女子である、女子は常にニコニコして心持軽く生活せねばならぬ、イクラ容貌を美しく飾つて居つても、其氣分が爽かになつて居なければ他を慰安することは出来ぬ、夫が他から歸へられた時に、出迎へてニコニコと笑へば、夫の疲勞は一返に消へて仕舞ふものである

シカミ面や不平面をするのは女の天職に背くの大なるものである。

第四は**確實性**である、或は保守性と云ふも可なり、世の中は古きを温ねて新しきを知るで、古き習慣を保持して行く間に新しき文明を生んで行くのである、文明の進歩を適當に引締めて行く處に完全の發達がある、夫が新しい事をすれば、それを程よく折合を取つて行かねばならぬ、其家々に傳はる習慣の如き正月の儀式の如き、舊慣を崩さぬ様にして行く處が女の確實性である、然るに今の女子には自分が先に立つて日本の良風美俗を破る様な事をする人もあるが誤である。

第五は**宗教性**である、佛權を清め先祖代々の御靈を祭り、お華やお線香を上げると云ふことは多く婦人の役目となつて居る、又宗教的信仰心は男よりも女子の方が發達して居るのであります、女子は獻して憂鬱に陥り易いのであるが、此憂鬱を拂ふには宗教の信仰によらねばならぬ。

第六には**慰安性**である、人生の慰安者たることは婦

シハウエル氏は、「男子は理性智識廿八才まで發達す」と云つて居ります、女子は十八才で身性の發達が止まつて仕舞ひますが、この意味に於ては生涯子供であつて、何時でも心は若いのである、斯様な次第故女子の教育は十八才までに仕上げねば、十八才後は學問さしても發達し難いのである、女子を持つた親達の考へ置くべき事である、それから女子は生涯の内に二回最も危険な時がある、その時は心がムチャクチャになつて仕舞ふと云ふ事である、ヒステリー性となつて品性を失つて仕舞ふ様になる、姑が八ヶ間敷と云ふは丁度この時に出逢ふからである、第一回は十七八才の時、第二回は四十四五才の時と云ふ事である、こう云ふことは女子の身體に起ることであるから注意すべきことである、斯様な時には宗教的精神に依ると、大氣を吸ふて精神を爽快にする事が大切であります。

居るのでありますから、此子を生むことに對して、男子はその御禮に骨を折る様に出來て居るのである、男の天職である、社會の爲め、夫の爲め、慰安者と爲つて、人生の活氣を添へて行くのが婦人の長所である以上、の六點は婦人の長所の重なるものであります、此長所は今後益々發揮して行くべきであると信じます、**女子の短所**は第一身體の弱質なることである、女子の體質はドーしても男子の身體には及ばない、女子の身體の發達は十八才にて發育が止まるのである、十八才になると子を生む生理が整頓するのである、社會學の泰斗スベンサー氏は、「天は婦人をして其母たるの職責を準備せしめん爲め、其個性的發達を尙早く停めて、其職責に必要な方の大貯蓄をなさしむ、爲めに其生長期は早く止まり、身長低く機關の發達少なく營養力のみ尙大に活動して種族を傳ふる方面に利用せらる」と申して居ります、女は十八になると新しき人物を造る犠牲に成るので、精神上的の發達も身體の發達に連れて女の子の智力は男の子よりも早く發達する、故に男の十四五才は家事の役に立たぬが、女の子の十四五才になれば立派に母親の手助けをする、シヨッペ

が女を助けねばならぬと云ふことは、女が子を生む御禮である、この御禮を指して女を押し込める杯と考へるのは大變な誤りであり、女は自身に自分は力の無いものであると云ふことを自覺して居ります、少し重いものはアナタ此荷物を持つて行つて下さい、そのかわり甘い御飯を炊いて上げますと云ふ様な譯であります、婦人には愛力性があつて男でも力の無いものを好まない、自分の夫が外でナグラレて來る様な意氣地なしては満足しない、私の知人に極温順な性質で立派な人があるがドーユーものか女に愛されない、あまりおとなし過ぎると云ふことが原因でありました、女はドーしても力の強きものに依頼するのである、又女には、形の美人であると云ふことを見て貰ひたいと云ふ考が強い、其れが爲めに、化粧に時間が費へる、元來婦人の化粧するのは男子に美しく見られたい爲であります、男子は果して其化粧を喜ぶかと云ふと、一通りは化粧もよいが餘り長時間を費す事に於て之を喜ばぬものである、女子として精神美に重きを置く事

は、容貌美に於て望みなき場合に限ると云はるゝ様では心細い事でありませぬ、婦人の氣質が悪い爲めに醜縁となり、又夫婦喧嘩をする事は澤山あります、故に此精神の美を養ふ様に心掛けねばなりません

第二に憂愁と云ふて女は心配性のものであつて、老居を見ても喜劇杯は面白がらんで、何か悲しい様な事であれば眼を泣はらして悲んで見て居ります、人の心配の事を根掘り葉掘り聞たがるもので、心配せんてもよい事を心配して苦勞して居つて、夫が外から歸へつても、心配相な顔をして、青い息を吹き掛ける様な事をする、一日骨を折つて歸へつて来て、此青い息を吹き掛けられたならば、大底の男はまいつて仕舞ひます此心配する癖は直さねばならぬ、此には宗教の信仰が最も助けとなるものであります

第三に女子は勇氣に乏しい、何事でも自分が仕様と思ひ立つた事を爲し遂げる力が缺けて居る、剛情はあつても勇氣が乏しい、正しき事を仕遂げる事は何人も女子に於ても崇高なる道徳の精神を發達させねばなりません、男子は國家觀念に就ては常に立派な考を持つて居ります、女子も男子に劣らぬ様國家の上の思想を走せて貰いたいものである、以上は婦人の短所でありませぬ、前に擧げた長所は益々發揮して行き、これ等の短所は段々少なくて行く様心掛けて行くが婦人の修養の方針であると思ふ、而してこの修養に對する佛教の思想はどうであるかと云へば、元來佛教は尤も高等なる宗教であつて、人類の宗教性を健全に導くものである、特に女子問題に就ては、極めて整ふた教訓を示めされて居る、前に述べた女子の長所を發揮することに就ては、第一母の情を極めて稱揚し、随つて母の恩の重きを教へられて居る、佛教では父子と云つて母を云はぬが、佛教では父母の恩を教へ、殊に母の恩を悉く説かれて居る、釋尊は母摩耶夫人の爲めに摩耶教をお説き遊され、又涅槃の時も母の爲めに再び入空より醒めて、孝戀の情を表はすと仰せられて居る、故に日蓮上人に於て見るも、上人の孝心は尤も母に對し

せねばならぬ事であるが、女には途中に挫ける様な場合が多い

第四には判斷力に乏しい、講演に行かうか行くまいか中々極まらない、二三時間かゝつて漸く行くとするどの着物に仕様か、あれかこれかと筆筒から出したたり入れたたり、此が又中々極まらない、遂に時間に遅くればなる、それ故始終忙しい、此の様に萬事に決斷力が乏しい、此も氣を付けて直さねばならぬ

第五に最も大なる缺點は國家觀念に乏しい事である女子は自分の目の前に顯はるゝ事に就ては注意深く考もするが、其事が國家の上に如何なる影響を及ぼすかと云ふことに就ては考の及び難いのであつて、これが婦人の大缺點である、常に大きな所に目を付けて考へる様にせねばなりません、婦人の虚榮が社會人生に如何様に波及し、國家經濟の上に如何なる損失を與ふるかと云ふ様な事は考へないで、但自身の小なる満足を求めんと欲するものである、社會公共の事業は男も女も共にやつて行かねばならぬのでありますから

て發動して居るのである

利部鈔に

父母の御恩は今始て事あらたに申すべきには候はねども、母の御恩の事殊に心肝に染て貴く覺え候、飛ぶ鳥の子を養ひ、地を走る獸の子にせめられ候事目もあてられず、魂もさえぬべく覺え候、其につきても母の御恩忘れがたし、胎内九月の間の苦み、腹は皺をはれるが如く、頭は鍼をさげたるが如し、氣出るより入る事なく、色は枯れたる草の如し、臥ば腹もさけぬべく、坐すれば五體やすからず、かくの如くして、産も既に近付けば腰やぶれてつさぬべく眼は天に見るか覺え、かゝる敵をうみ落しなば大地にもふみつ腹をもさきて捨つべかりしに、さはなくして我が苦を忍びて急ぎ懐き上げて、血をねぶり不淨をすゝぎて胸にかきつけ懐きかゝへて、三箇年の間懇懇に養ふ程に、母の乳をのみ事一百八十斛三升五合也、此乳のあたひは一合なりとも三千大千世界にかへぬべし云々



この御一文によるも、母の恩を説き得て真に迫るの感あり、こゝに佛教が女子の長所たる母の情に尊敬を拂ひ、之を女子天職の最大の權威と見做し、之を教として天下に流布せんとするは、たしかに女子唯一の味方なることが知らるゝのである。

第二の長所たる慈善の性に就ては、佛教は女子の慈善心を奨励し、看護の事の如き尤もよく説き示めされて居る、我國奈良朝の佛教に於て、慈善事業の行はれしは皆佛教の精神に基きて行はれしものであつて、全體に於て佛教は人々に菩薩の一分として働く事を勸むるので、観音の優しきも文殊の賢きも、皆これ人々に之を倣はしめんとするのである、佛は慈悲の結晶なれば之を信じ之を仰ぐに於て、慈善の精神を啓發し來るは當然の事である。

第三に優雅性に就ては佛教は美を稱揚し優雅の心を啓發するもの、東洋美術の淵藪は佛教なるに見るも、信仰と優雅性の關係は自然に行はるゝものである。

第四の確實性に就ても、宗教は進化するにしても、一

よりに改善すべきは無論であります、精神の方面から慰安を得て進む事も大切で、之には佛教の信仰に依り精神の快活を得て大に助けとすべきである。

第二の憂愁性に就て、これ最も佛教の信仰を要する重大なる問題である、女子一般の通有となれる憂愁性を匡正するには、必ず佛教信仰の力に俟たねばならぬ、精神的の慰安は宗教の信仰を以てすべきことは讀者の一致して居る所である、この憂愁を信仰の光によつて除く事が、如何に女子自身に取つても、又その職分の働きの上に就ても、大切なるかは殆ど測り知るべからざる大關係を有つのである。

第三の勇氣の乏しき事も、信仰により清い元氣の勃然として起るは、佛教に須摩提女の事に就て、我は女人なりと雖も志剛屈すべからず」と云へるに見て明かである、之は今日多少の信仰的經驗あるものに就て何處でも聞き得べき所である。

第四の判断力に乏しき事に就ては、感情一片の宗教は却つて害あり、之を救ふものは、理性と信仰とを調節

方に萬世不變の信仰を基礎とするが故に、決して輕佻突飛の惡風に走ることはない、殊に佛教は理想と信仰との調節を貴ぶ世界最高の宗教なれば、之を信するに於て適當なる進取的な精神と同時に確定堅固の心狀を養ふは見易きことである。

第五の宗教性は申すまでもなく、佛教によつて健全に指導せらるゝので、我國の國民道德とも融合し、又風俗人情とも調和して發達したる宗教なれば、我國の女子が宗教を求むるには無論、佛教に來つてその健全なる方面の教を奉ずべきである、日本の女子は日本の宗教に充分の研究と信仰を捧げざるより外、眞正な味方も活きも得らるゝものではない、こゝに氣の附く人の少なきは、眞に氣の毒千萬の至りてあります。

第六には慰安性であります、佛教の信仰に入つて精神の満足を得て居れば、心の底から清い高い慰安を與ふる事が出来るのであります。

次に短所の匡正に就て、佛教の關係を見ますると第一が體質の弱い事ではありますが、之は運動や衛生に

する主義の佛教に來るを肝要とす

第五の國家觀に乏しき事に就ても、多くの教は個人的慰安に止まり、その教化が國家觀念にまで及ばない、之は日蓮上人の教へられた佛教が尤も適當である、この判断力の養成と國家觀念の養成に就ては日蓮主義を推薦するに躊躇しない次第であります。

己上略述するが如く、佛教は女子の修養に關してその長所を助長し、その短所を匡正する働きを教へてあります、希はくは之等の趣旨を諒し、自から婦人の先覺者として修養を積み、更に惱める人々を指導せられんことを望む次第であります。

### ▲日蓮上人の警訓に云く

「法華經の信心をとをし給へ。惡しき名さへ流す。況んやよき名をや。何に况んや法華經故に流せる名をや」

# 國民教育と日蓮主義

子爵 五島 盛光

現代は一切の事柄が非常なる進歩を致して居ります  
 が、殊に教育制の實施は著しく普及して居るのであ  
 ります、統計に依りますと、我國の義務教育は、明  
 治十二年には百人に付き就學兒童十二人の割合であ  
 りましたが、今日では九十八の割合であります、之は當局  
 の獎勵もありますが、地方町村によりては、之に要  
 する負擔の甚だ重い處もある位で、之が爲に義務教育  
 も中々盛大になつて居るのであります、今日では、も  
 はや義務教育を受けないものは無いやうに行き届いて  
 居るが、而しながら教育は、學校教育のみに任せて置  
 くべきものであつたやうか、私一個の見解ではある  
 が、小學校の修身だけは實に物足りない、昔は今日  
 の様に算術地理歴史等の思想は進んで居らなかつたけ

れども、四書五經などを素讀から習つて、少年の時か  
 ら道德の觀念を頭に入れて居つた、今の修身科は技業  
 の事が多くて人生の根本の問題が無い様である、學校  
 では天とか神とかいふことは教へて居らない、勿論是  
 は現在の教育制度に於て自由を許さぬからであらう  
 が、廣い意味の宗教の事は教へるやうにしたいとあ  
 るも、種々の機械的の事は整ふても、第一義が充分で  
 ないと其結果が甚だ悪い、維新以來日進月歩で陋弊を  
 破つたはよいが、何も彼も一概に在來の制度を破り盡  
 した、それもまだよいが、其れに打つて代つたものが  
 どんなものであらうか、即ち種々の文明が入つて來て  
 其中には惡思想も入つて來ましたので、今の日本人の  
 思想は、餘程日本の氣風が薄くなつて居りはせぬか、

(2) 説き  
冷不

西洋では如何かといふに、英國佛蘭西等の差別はあるが、  
 英國は正直を主として居る、佛國は一寸派手なやうで  
 あるが田舎へ行くと却つて質素である、佛蘭西の地方  
 などへ行くと、今なほ自働車を化物の様に思つて居る  
 所もある、丁度我國の田舎の人が東京を一概に繁華な  
 所だと思つて居るが、其東京の中にも實にヒドイ處も  
 あるやうなものであります、此一概に表面から論ず  
 ることの出来ないものであるから、又國體や人情も異  
 つて居るから西洋を一概にいふのではないが、獨逸は  
 如何にすれば英國に立ち勝れるかと苦心する爲めに  
 歐洲中では軍備が最も盛んで、義務教育の制度も獨逸  
 が最初でありまして、彼のプロイセンが聯邦盟主とな  
 つてから、國民が立派にならねばならぬといふ所から  
 圖書館や通俗講演等も盛んになりましたのであります  
 そこで我國は一等國であると云いますが、果して一等  
 國の實力を具へて居るのでありましようか、經濟の上  
 に軍備の上に國民の品性に省みて耻づる所はないであ  
 らうか、が今日の一般國民の有様では何うかと怪まれ

る、教育は進んでも品性は高潔でないものが多くなつ  
 て來る、故に學校教育では不充分であるから社會教育  
 と云ふことが行はれる、先覺者はこの事業に力を致さ  
 れる、人は必ず學校家庭以外に社會教育を受けるも  
 のである、孔子、基督、釋迦も矢張社會教育者で、其  
 宗教道德の區別なく、其行が皆今日までも影響して  
 居るのであります、又吾人とても世にある以上は其一  
 言一行が人に影響しないものでもない、故に即ち互  
 が社會教育者である、學校や宗教家のみが社會教育者  
 ではない、然るに今日の狀態は如何であるかといふと  
 此點に於て自覺して居るものが甚だ少ない様に思はれ  
 る、凡て世に活動する以上はお互が此覺悟がなくては  
 なりません、獨逸は之に氣が付いたから、講演會、動  
 物園、公園、出版物などがあるの、社會教育上斯く  
 なくてはならない、なほ、今日の新聞記者などは特に  
 此考を持つて貰いたい、然るに今日の新聞紙を見る  
 と何れも皆此點を忽せにして居るやうである、が之は  
 強ち記者のみが悪いのでもない、世の人が悪い記事を

(3) 説き  
冷不

喜ぶからであり、又た歐州では公園の植物に必ず  
 其名が書いてあるの、非常に智識を得ることが出来  
 るが、日本には此設備がありません、活劇寫真にも  
 教を害するものがあるけれども、反てジゴマ式の寫真  
 を喜ぶ様々譯で、實に輕佻浮薄の精神状態のものが多  
 い昔の人は今日の人よりも眞面目で、外國で云ふやう  
 な公徳に就ても實に行き届いて居りました、帝國大學  
 にウリビンといふ人の居られた頃、私は日本の飛脚に  
 就て研究したのを書いて見せた事があります、昔は町  
 飛脚は寛文三年に起り、大阪城番の士が保護して江  
 戸に往復したものであつて、其後日本橋(土橋であつ  
 た)にカマスがあつて、之に郵便物を入れて置けば飛  
 脚が取つて行くといふ方法で、大阪から来る旅人の宿  
 があつて之に郵便物を配達した、斯うして江戸大阪の  
 間が八文である、外國では電車に車掌なく、一の備へ  
 てある箱に乘車賃を投入すれば自動的に切符が出て來  
 る仕掛であるが、昔の日本の郵便も八文投入して置け  
 ばよいので、投入しないやうな不正の憂もなかつた、

(2) 自代カと公徳の  
 其他にも實例は幾らもありますが、兎に角昔は公徳も  
 踐行されて居つたのである、

凡そ公徳といふことは、自分で自分を支  
 配する力がなければ行はれるものでない、  
 さればそれには自信力がなければならぬ  
 而も亦た自信力は其根本に至誠がなけれ  
 ば出て來ない、人の居ない處で悪い行を爲すも  
 のは自信力がないからで、又た自分で自分を支配する  
 力がないからである、現代の人には此力がないから政  
 治家でも教育家でも立派なものがないのである、若し  
 も日蓮上人の如く至誠の念に溢れ、眞の自信力強き人  
 が有つたならば上下は忽ちに徳化されるのである、日  
 蓮上人には本化の自覺があつた爲めに總てに公明正大  
 であつた、北條氏とも妥協することなく、佐渡から歸  
 られて愛染堂の別當とするからと云はれても、之に従  
 はれなかつた一事に見ても明かである、今の世には學  
 者もある名論卓説といふものも澤山あるけれども、中  
 には人の學説を書いて自分の論文として居るものも多

世の  
 上

い有様で、兎に角學者も中々油断が出来ない、上人は  
 左様でない、豫言が的中しても決して自慢などはしな  
 い、之は自信力ある所以であつて、自信力とは自負心  
 とは違ふ、道を念ひ國を思ふの誠心から出るものであ  
 ります、私などには六ヶ敷かも知れぬが、何とかして  
 思想の一分なりとも得たいと思ふて居るのであります  
 そこで日蓮上人の主張せられた教義は、未來を説く  
 ことは勿論ではあります、現世をして完全なる樂園  
 とせなければならぬといふので、吾人が此世に活動す  
 る上に、信仰と實生活との調和を説いて居るのは、吾  
 人に取つて眞に力ある教である、殊に上人は命を大切  
 とし「命と申すは一身第一の珍寶なり」と仰せられた  
 今日の人如く何か失敗したからといつて直ぐ投身す  
 るなどは決して一等國民の態度ではない、此日蓮主義  
 が現實の人生を重んずるとは、他の宗教に卓越せる一  
 面であつて、倫理と宗教と合するとか合せぬとか言ふ  
 とは論議を用ゆる處でない、法華經には既に此意義が  
 充分説き盡されて居る、忠君愛國夫婦和合師長等の人

倫も上人の遺文中には到る處拜見する事が出来る、殊  
 に上人一代の行動が明かに之を証明して居るのである  
 が、之を倫理の方面より其一端を窺はゞ上人は實に至  
 孝の人であつて、身延の山から日々房州を遙かに望ん  
 て父母の地を拜し、國産を見ては故郷を偲べられた事杯  
 は、既に人の知つて居る所であらう、又た日蓮上人の  
 牢中の苦を勞はり、或は伊東御流罪の砌、救はれた船  
 守彌三郎夫婦に、自分の父母が伊豆に生れ替つて自分  
 を扶けられたのであらうと感謝せられたなどは、今日  
 の所謂倫理を自ら之を實行されたのである、  
 現代の人も斯かる思想に導かれて、自己の德行を進  
 めて行かねばならぬのであるが、政治家は唯だ權力争  
 ひをのみ事として國を思つて居るか否かは甚だ疑問で  
 あるし、宗教家は寺院に立て籠りて活動をなさぬ、上  
 人は自から造んで辻説法をなされた、而して如何にせ  
 ば國家を安泰ならしめ得るかといふ愛國の念より活動  
 されたのである、  
 さればとて日蓮が法を知り國を思ふ精神の賞めらるべ  
 きものありしは、  
 日蓮が法を知り國を思ふ精神の賞めらるべ

き善なるに、却て此の如き迫害を蒙むつたとして不思議がられた、上人は國難を救ふために全力を盡されたので、「須らく國家を祈りて佛法を立つべし」と絶叫された、さうして此精神は如何なる場合に於ても現はれて居る、而かも身命を捨て、働かれて居るのでありま

分會  
社  
信  
の  
あ  
ま  
の  
信  
の

然るに今日の政治家が宗教に對する態度もよろしくな  
いが、亦た宗教家も社會の事が解らぬ様でも困る、さ  
ればとてまた解りそこなつてもよろしくない、調子の  
浮いた思想は最も恐ろしいので、日比谷公園事件の如  
き事を演ずるのには困る、形は立派なやうだが精神の  
修養は出来て居らない、昔の如く君子國だと自稱し得  
るならよろしいが、税制整理をやらねばならぬ時代で  
あるから、セメテは國民性だけでも確かりして居ら  
ねばならぬ、彼のラスキンが建築は國民性を表はすと  
いひました、之が眞理とすると甚だ心配である、法  
隆寺の如き昔の建築物は千年後の今日なほ立派に存在  
して居るが、今日の建築物は實に不堅實なもの計りて

べきことを教へられて「とくいひたらんには政道ぞか  
し」云々とも仰せられて居る、斯くして此主義が行は  
れるやうになつたならば、國家の根本的實力が充實す  
ること明かである、然るに現代の有様は、新らしいと  
云ふ歐州思想が輸入されてから、名は色々異つては  
居るが歸する處は非國家主義になつて居る、併しなが  
ら吾人が國を離れてどうして生存し得るであらうか、  
一等國の名があつたにしても其實がなければ何にもな  
らぬ、其れには私は日本國を「日蓮主義」としなけれ  
ばならぬと思ふのである、世間には私の理想に近い人  
もありまして、私の知つて居る人であるが、政治家で  
中々多望な人であるが月々自宅講演をやつて居る人も  
ある、社會は死物でない、生きて居るのであるから中  
々に六ヶ敷い、昔のやうに獨善主義でもかまはないの  
ならばよいが、今日は社會的、活動の世の中であるか  
らうつかりして居られぬ斯様な社會に處して行  
くには日蓮上人の御精神の耳の垢でも飲  
ませたいものである、小松原の御難、松葉ヶ谷

ある、外國人が新橋へ着いた時に、日本の昔の士族の  
如きものが見られ、ばよいがと云ふさうですが、法隆  
寺が出来た頃は文明の時代であつた、さすがに聖徳太  
子が建てられただけに立派なものである、聖徳太子は  
無二の佛法歸依者であつた、人によると、太子は  
佛法にカブレて居たといひますが、其は未だ太子を知  
らぬもの、言葉でありませぬ、宗教がなくても差支がな  
いなど、云ふ無宗教者は恐ろしい人と謂はねばならぬ  
古語に人にして道ならんば魚の水を失へるが如しと云  
ふ事があるが、人によると人が道を離れたとしても食つ  
てさへ行けば可いと云ふ者もある、此等は既に人では  
ない、生きて居ると云ふだけの禽獸的生活である、若  
も國民の銘々が道を離るゝに至つたならば、國家の發  
展は望むことが出来ない、故に國家には道が大切であ  
る、道と云つても大に選擇せなければならぬが、日本  
の國民が法華經主義者によつて活動したならば、立派  
な効果が現はれるだらうと信ずる、政治家にてあらう  
とも實業家であらうとも、必らず此主義に依つて立つ

の焼打の如きみな吾人の注意して置かねばならぬこと  
で、吾人は斯様な大難に出遇つて置くべき必要がある  
併し日蓮上人が此大難に逢はれた時の如うな不動の信  
念さへあれば、如何に世の中に難儀が來ても決して眞  
頼することはないので、彼の熊澤蒼山先生でさへも  
「うきことなのほ此上につゞけかし云々」といふ歌を讀  
んで居るのでありまして、維新當時の志士は何れも皆  
神明に誓つて、身を捨て、彼の如き大事業を成し遂げ  
たのであるが、今日の人は何事にも一生懸命といふこ  
とは言ふが、實際に一生懸命といふことはないやうで  
ある  
彼の名宰相であつた白河樂翁は聖天様の信者でありま  
したが、其願文を見ると、自身及び妻子を犠牲にして  
も天下を治めたいと云ふことがある、凡て古來の名人  
は皆一生懸命であつたが、今日は何事も皆形式に流れ  
一時を胡魔化して居る、私は或る意味から云へば、今  
日の時代は六百年己前の時代の國情と同じであると思  
つて居るが戦争でも熊谷流に人生の無常を感じて宗教

に入つて世を捨てたのが、決して少なくはなかつた、若し今日熊谷流のものが續出したならば、それこそトンだ事になる、故に活力ある大徳教大明教を信奉しなければ、到底國家を泰山の安きに置くことは難い、其れに就ては日蓮上人も釋尊も今日なほ常住に居らせられるのであるから、各人が此等佛祖の精神に依つて活動して行くならば國家の繁榮して行くことは明かかとであると思ふ

此世の中を社會學の話から云へば、動物の進化を見るに、蟻や蜂のみならず蟹の一種も社會生活をして居るのであるが、萬物の靈長たる人間が而も行儀が悪い、古歌に「行きあへば互に道をゆづり合ふ」云云とあるが如く、動物中にさへ色々の秩序や禮儀がある、人間世界には昔から聖人や賢人の道が存して居るけれども今日の人は皆此道をぬけて行つて終うから困る、人間は人間が萬物の靈たるだけの事は實行して行きたいと思ふ、徒らに表面の事に酔ひ、バタ臭くなつて、新しい女や新しい男が生れて來るが、本家の佛國では

多(多) 多(多)

# 日蓮上人と婦人

慶應大學教授 柴田一能

## ▲體格の一番頑丈

てあつたのは、房州天津の漁師の身體が優秀であつたと云ふことであるが、上人は此の天津の濱濱の小湊で生れて、幼少の折は海岸生活を送られたので、皮膚も丈夫であつたに相違ない、さうして體格は魁偉て色は淺黒く眼光人を射ると云ふ工合で、眞に男らしき容貌であつたと拜察する、されば華美に傾き易い婦人の身、形相の上からは親しみ相もない筈である、然るに一たび

## ▲上人の音容

に接したる婦人は、限りなき悦びに充ちながら食事衣服を供養する、また上人が數々の二字を身に讀んで佐度ヶ島へ參られて居る時でも、遙るくかよわき身を以て一本の杖を使

日蓮上人の御書中には、「女房と酒打飲みて何の不足かある」と云ふ文章があります、上人は妻帯せられた方でない、獨身生活のものでありました、故に夫婦と云ふ經驗はありませんでしたけれども、而しながら婦人に對しては非常に深い縁故を有つて居られたのであります、獨身者であつた上人は、婦人に相接する機會の多かつたことを拜察する、それは上人が自から筆を採りて、婦人に送られた消息文の多いのを以て知らるので、その往復が如何に頻繁であつたかを想ふのである、されば上人を露骨な強い一點張りであるとするが如きは、未だ上人の全面を見ざるものである、世人の上人觀は、その大部分が意思の強い人である、と云ふ位で、優しい上人の人格的方面を窺ふたものは少ないのである、曾て醫界の名士長谷川泰氏が、日本

國中徴兵適齡者の體格を調べた處が

りに上人を訪ねた婦人もある、背に供養の品々を負ふて身延に詣つてた婦人は甚だ多い、殊に七十餘歳の千日尼御前が數百里の旅路を費して身延に上人を尋ねられたが、斯かる事柄はお世辭では出来るものでない、之等の婦人は精神の奥底より深く上人を信じて居られたから、崇高にして美はしき功德を積むことが出来たのでありましよう、上人は體格頑丈で色淺黒く、婦人の弱點好奇に投ずる優男の風は一分も具へて居らぬが、若さも老へたるも皆齊しく艱難辛苦を犯しながら感謝と幸榮とを以て上人に逢ふたのは何う云ふ理由であらうか、おもふに上人と多くの婦人との關係は、人相や容貌の問題でない、心と心との關係である、上人

### ▲温かき慈悲の力

の水か、渴せる婦人の心の奥に泌み渡つたからである、それ故に何となく慕はしい懐かしい心持が起りて、暑さも寒さも道の遠いのも、何の厭ふ所があらうものぞ、鎌倉より佐渡へ行くものもあれば、佐渡から身延へま

ことは事實である、私の身分として考ふれば、自分の生れた家の商賣は魚屋である、上人は漁師の息子である、そこに私は日蓮上人の門下に列する何かの縁故はある、この魚屋の子である自分が、随力弘通を願ひに至つたのは吾が母の力が多いことを感ずる、私の實験より推察申上げますと、日蓮上人を偉大ならしめたのは母梅菊御前であると信ずる、さりとて父の重忠公が知らぬ顔して居つたと云ふのではない、父の人格感化の存するは勿論の事ではあるが、家庭の温情に養育せられて出来上つたのは母の手である、家政上の事は一切婦人が掌理して居る、さうして家庭に生活する時間は、父よりも母の方が長い、ことに時代が進み生存競争が激しくなつて来ると、父は朝早く家を出て、夕刻に歸ると云ふ有様であるから、父の顔さへ能く知らぬ子供が多くなつて、總て母を頼はす事になる、從て母の一舉手一投足は、悉く子供の心に印象せられて善悪共に影響する所多いのである、それ故に母たるものは萬事に注意せなければならぬので、日蓮上人の如き

て訪ねて来られるのである、

上人は獨身生活であるから妻としての經驗はありませんが、夫婦間の愛情の極致を察知して居られましたので、その情理に就ては吾人以上に味ふたものであらう、人間として生れたる上人は、母梅菊御前の胸より婦人に關する意味を傳へ知つたものとおもふ、上人が本化上行の再誕であると自覺に到達するまでには、

### ▲人間として母の訓化

を受けたことは甚だ大なるものがあるであらう、およそ母として子を生む上からは、偉磊人物を作るのが先天の任務である、若し生んだまゝ捨て置けば立派な人にはならぬ、必ず磨くと云ふことを加へねばならぬ、偉人となる様に養成して行かねば偉人とはならぬのであります、釋尊は生れると天上天下唯我獨身と云ふたと申して居りますが、釋尊の口より響いたオギャ／＼のその聲は、後代の人心には天上天下唯我獨身と聞ゆるのである、而して世界の歴史に現はれて居る大多數の偉人は、母の訓化より成るものである

も母の偉大なる訓化があつたことは明かなることとて、上人が母より受けた訓化をいかに難有く感じて居られたか、その有様を窺ひますれば、伊豆の伊東に流されました時、漁師般守彌三郎に扶けられたのであります、この彌三郎に送りました感謝状を拜讀致しますると、上人の祖岩の運命を救ふた彌三郎夫婦、この夫婦が命懸けて日蓮を扶けたのは、日蓮の父母が伊東へ生れ變つたものではあるまいかと云ふ、斯かる感謝状を貰つた彌三郎夫婦は一段の感を深ふしたことであらうされば夫婦が、上人の爲ならばと云ふ決心愈々固きを加ふると共に、偽らざる夫婦の至誠は、伊東三ヶ年の供養を自發的に引受けられたのである、而してこの夫婦の清き給仕は、彌三郎の妻の覺悟が強かつたから、後代尙ほ信者の模範として敬仰を拂はるるのである、およそ世の中の仕事の根柢は、婦人に關聯せざるものは少ないので、昔から有名な戦争の起源は、多くは婦人が關係して居る、現代の西洋文明は美人の力が加はつて居る、若しクレオパトアの美人の鼻が一分欬けて居

つたなら西洋の文明は今日の如く進まなかつたのであらう、男子の容貌は人の殺活に關係する所が少ないが美人の顔の如何によりては、世界の文明を左右する力がある、従つて一家の興慶は婦人の心懸如何に存するのであります

### ▲人間活動の根本

は、食物の供給に在るので、この食物の選擇調理如何によりては、良人や子供の氣分に甚しき影響を與ふる、食欲は何人でも止めることが出来ないもので、人間は食ひ飲むと云ふ爲てはないかと云ふ位である、この欲望は人間生存上必然の要求で、拒非することの出来ない人生の一大事實であるから、佛教には戒律を八ヶ間敷言つて、生の物や辛い物を禁じて居る、それは生て食ふと嘆りぼくなり辛い物を食ふと淫欲が盛んになるからである、故に昔から禪宗寺の門前には、不許葷酒入山門と書いてあるが、是は佛教戒律から來た思想であつた、而しながら現今は調點が變つて來て、許されども葷酒山門に入るのであると言つて、盛んに生

の物も辛い物も食つて居るのであるが、家庭に於て妻君が、家の専主は意氣地がないなどと改良論を唱へるものがあるならば、五辛物を食はせると大分氣が強くなつて來て賑る様になる位で、食物の調理如何は人の性格に影響を與ふる、さう云ふ工合に食物の全權を握つて居るのは婦人である、婦人は一家に於ける權威ある主宰者とも云へる、かう云ふ位地の婦人が家庭の妻として三人五人の子を設け、自分の修養したる力を以て立派な人間を作る、男一人よりも女一人の方が最後迄押し通す力がある、但しには女心に秋の空と云ふが婦人よりも反て男子の方が氣が多いやうに見うける、もとより或程度までは婦人の氣は變るが、女の念力嚴をも徹すと云ふ諺もあります如く、この力をして祟高なる宗教の方に應用するを得ば、高等なる人格を完成する所以である、婦人の修養は最後この方向に進めて來なければならぬのであります、而して上人は婦人に接する機會あるごとに、熱烈に傳道を爲されたのである、即ち供養の品物を送られた御禮の御文章は、人

生の覺悟を教へ女人成佛の要路を説いて、堅實なる信仰に安住せしむる、この信仰の悦びを得たる婦人の力は、それからそれへと傳はつて行く

### ▲過去に於ける日蓮主義

は婦人の力によりて非常に發展したのでありまして、廣宣流布の一部分は婦人の力である、根本から信じた熱のある處から出發して、五十展轉の力を發揮する、婦人は相對したる人と煙草や茶を飲みながらズリ／＼と説き及ばすので、大抵の人は感化されて仕舞ふのであります、故に信仰に住せる婦人は、常に傳道の中堅となり先覺者となるの用意がなければならぬ、日蓮上人は三十二歳の時、法華經主義の新宗教を發表せられしより第一着に筆を染めたのは女人往生抄である、宗教信仰の生命を天下に弘むるには、婦人の威力によるべきを主張したのである、從來の宗教は女人を罪惡視したのであるが、日蓮上人の主張と法華經の思想は、佛性互具を説いて女人の成佛と立證するものである、又儒教などに於ても、道徳上より發展する

ことを得ないやうに論じて居つたが、上人は女人の身なりとも其修養の如何によりては、男子を凌駕し得るものであると云ひ、大に婦人の地位を高めたのである、婦人の地位が川流れの碎鏡で頭の上らぬ待遇を受けて居つた習慣を打破つて、佛の眼から見れば、等しく愛子であると云ふのであるから、婦人にとりては百萬の援軍を得たと同じである、斯の如く上人は

### ▲婦人問題に着想

し、四十四歳の時、薬王品得意抄を著して詳しく婦人修養の事を説き、更に婦人の地位天職を自覺せしむるに努めたのであるが、當年の婦人は身命を捧ぐるまでに感奮を深ふたのである、而して上人に教化せられたる婦人は非常に多かつた、また従つてその消息文は六十餘通もある、中にも法華經の信仰を勵むがために、世より迫害を受け一家は三類の法敵に惡まるゝ時もあらば、急いで身延の山に御出てなさい、共に身延の清き流れの水を汲み、山の菓實など採りて味ひまじしようと云ふことがありまして、いかに熱烈なる情合ある言葉で

ある、その思召が身にも心にも込み込んで、身命を擲げ打つても云ふ心が決意したのであらう、かくあれはこそ、妙令の婦人が供養の物を背負ふて、身延の山奥まで持つて行かれたのである

### ▲現代の日蓮主義

正に勃興の機會は熟して男子の會合甚だ多きを加へ、時代の風潮を革正するを得るは慶すべき事なりとするも男子のみの會合で、廣宣流布の大願は全ふすることが出来ない、男だけが活動すれば足れりとするのは、未だ眞理を得たものではないとせん、婦人も男子と相並んで相當に知識と地位を高めて行かねばならぬ、一家の幸福も一國の文明も、互に磨き共に進み行く處にある、米國のエール大學の教授が、社會學上人間一人だけでは片輪である、一人の男と一人の女とが集まる所に社會を組織する基本がある、夫婦合體の上に於て社會上の組織が完成せらるゝのであると云ふて居る、則ち婦人の力を籍りて來なければならぬ、されば完全なる娑婆世界は男子のみであく婦人と協力して作

り得らるゝので、太鼓を叩へたり鐘を鳴して活動せずとも、ズリ／＼と婦人特色の方法を以てせば、容易に他をして感化し得るのである、例せば臺所の方より「お免遊ばせ若し貴方」と云ふ工合に、説き進めて行くならば、必ず宗教的の信念の力は現はるゝことと信ずる七百年前の四條金吾の女房妙法尼御前の、身心を捧げて法華經に歸依し上人を欽仰したるが如く、日蓮主義の下に集まれる婦人は、現代の紛亂せる思想の革正を期する心持を以て、其境遇場合に處して法を傳へ、色讀法華の妙行に努むることが大事である、斯くして自己は法悦歡喜に充ちた生活を送り、この心を以て子弟の教養に注意せば一家は理想信仰の光りに輝き、子弟は信仰に靈化鍛練せられ、偉人格を具ふるに至るであらう、こゝに於てか、現當二世の諸願は圓滿に遂げらるゝことであると信ずる

# 神聖なる労働

海軍少將 佐藤 鐵太郎

只今三上師より神聖なる労働といふ演題を頂戴しました、これは誠に意外千萬な難題で、丁度試験の場へ六ヶ敷問題を頂戴したと同様の感じてあります、答按を出さぬと落第になりますから、一生懸命にやつて見ようと思ふのであります

労働者慰安會、斯様な會は非常に味のあること、平素から考へて居るので、從て大に同情をもつて居るものであります、只今は面白い娛樂がありまして御愉快でありましたとしよう、其後七堅苦しい事を申し述べたいのは、甘いもの後へ苦いものを差上げるやうな評であります、苦いもの時には身體の藥になるのでありますから、暫らく辛抱して頂きたいのであ

さて、今日は盆の十六日でありませうが、盆とは如何なる事でありませうか、盆とは盂蘭盆と云ひ、アラ／＼したものを救ふと云ふ意味でありまして、精靈團を作りてお關子を供へることが盆じやない、盆の由來は、釋尊の弟子目連尊者が始めて神通力を得られぬ時、先に亡くなられた父母を御覽になりまして、父は天に生れて居られたが、母は罪障の爲め餓鬼道に墮ちて骨と皮とになつて苦んで居られました、之を觀た目連尊者は堪らなくなつて、早速御馳走を持つて行つて進められたが、母上天に喜んで食べやうとすると忽ち火になつて終う、どうしても食ふことが出来な

い、そこで目連尊者は釋尊の御前に参りまして申上げたい、如何に私が神通力を得ました、一人の



母を教ふことが出来ませんは何の効もありません、何卒佛の力を以て母を救つて戴きたいと願はれました時に釋尊の仰せらるゝには、之は到底汝の力のみを以ては教ふことは出来ない、必ず法を供養し僧を供養せよと教へられましたので、そこで多くの御弟子方を招いて大法要を營みされた、所謂法味を捧げたのであるさうして目蓮はこの功德善根によりて母を救ふことが出来たので、之が施餓鬼の灌腸であらう、故に益と云ふことは非常に深い意味を有つて居るのであり、即ち、従來行はれて居る個々の形式に囚はれたものでは可けない、大なる意味の救てなければならぬ、即ち社會人生の精神に食物を與へ、精神の根底より教ふのが其本旨である、不注意の釘一本と釘を打つ 今日は労働者慰安會で、労働と云ふと卑しい様に聞えるが決してさうでない、彼の親の財産を勘定しながら懐手をして徒食して居るものなどは宜しくない、併し労働と云つても、人の爲にならぬ労働は決して神聖ではありませぬ、又其労働が其場限りの間に合せてあ

ければ、決して神聖と云ふ意味は無い、私は法華經を尊信して居るものであるが、毒量品に説かれた如き不滅の觀念を以てすることなくしてはならない、即ち自分の爲す事が、永遠に人の爲になるとの確信の上に立つことを要する、或る人の家の板の破れ目へ、始終守宮が出入して居るので家人が夫を見ますると、中に一疋の守宮が大工の打ち込んだ一本の釘の爲に動けない、その釘のために出ることが出来ない、そこで他の守宮が日々食を運んで食はせて居たのであると云ふことで、私はこの話を聞てから、是まで嫌であつた守宮が厭でないやうになり、またが、この大工は釘一本を打つに何の注意も拂はなかつたに相違ない、面しながら、此釘が守宮を動けなくした動機ともなり、又之を助けて居る感心な守宮の動機ともなり、後に私が其話を聞いて守宮が好きになつた動機ともなり、またこれを皆様に話をし皆様に感心するといふことになり、またこれを皆様に話す様に大工が釘一本打つにも何の氣なしに打つてもこの

通りであらうから、決して疎かな心得を以て釘を打つてはならぬのでありはす、釘一本を打つ

私は、凡てのものは悉く不滅であると思つて居ります、之は自分が始めて考へたのではない、既に釋尊始め先覺者が道破して居るのであり、人は靈が其の存在の意義を全ふする爲めに肉體が出来たのである、大石良雄も足利尊氏も、今は亡き人でありはするが其靈は活きて居りしを、楠正成も然うである、現代は西洋の悪い思潮が流行して個人的事のみを計り、自利の主義に囚はれて共同生存の福利を思はざるものもあるが、誠忠無二なる楠公は、今尚ほ不義不忠を惡む精神を國民の間に養はれて居る、誰人でも一身の行動は、死後なほ人の語り草となり、良い人であつた彼もいつた遣うもいつたと、人を感化指導することを得ざるので、肉體は死んでも決して靈は亡くなるものでない、一本の釘を打つても眞面目ならば、自分の打たるこの釘は千年立

ても抜けぬといふ大觀念で打たならば、こに神聖の意味が込められて、自分どもは職分に忠實であるし繼て父母をも養ふこととなる、又其釘一本が日本國を打ち固めることもなるのである、日本の國民が其職業、即ち労働に従事する上には、日本國の爲と云ふ考を有つて居らなければならぬ、さう云ふ根本が定まつて居れば、どんな労働でも非常に價直あるものとなり、眞實に神聖なるものとなるのでありはするが、若し間に合せの遣り方であるならば、其労働は決して神聖とは言ひないのである、斯く申上げますと、如何に汗を流して働いたからとて、只だ働くと云ふことだけでは神聖の意味はありませぬ、其仕方の如何に依るのでありはす、彼の西洋の事が凡て可いとは云へませぬが、英國などは労働の神聖なる意味を能く理解して居る様に思はれる、労働するものは世の尊敬をうけて居るが、浪手徒食して居るものなどは撥斥されて居る、英國では汽車に乗つて荷物も預けても切符を呉れない、受取る時は列べてある其中か

ら各自の物を持つて行く、さうして少しも間違は起らない、我國で此様な事をしたら大變である、恥かしい次第であるが仕方がない、どうしても國民個々の精神を磨き上げて、神聖なる勞働に努力せなければなりません、勞力によらぬ富は罪惡であると考へなければなりません、ぬれ手で粟などは毛頭神聖の意味がありません。

今日は盆でありすが、印度では三月の末頃から安居といふて、其中に坐禪やら修行をして精神を練るのであります、さうして七月の十四日が尼さんの懺悔の日で、十五日は男の懺悔日で、十六日からは各自托鉢やら勞働やらに従事するのであります、其勞働の初日とも理解すべき十六日に、統一閣は於て勞働者慰安會を開かれたのは、誠に結構なる催してあります、この所に所成の一端を述べた次第であります。



# 佛教と道德

井村日威

## 一、佛教と人生

一體に今の世人が佛教に對する感想は、佛教は單に未來の事計り言ふて居つて、我等現在の生活には直接必要が無いものであると云ふのが大部分であるらしい、此感想は教を説く僧侶の側にも盛んに人生を否定して未來の往生極樂を説法して居るものがあつて、今の佛教信者と稱するもの、大多數が其感想であることは否むべからざる事實であります、然しながら釋尊の説法そのものが、果して斯様なものであるかどうかと申せば、決してそうではありませんが、佛陀の本懐たる法華經には、滅後末法に於ける邪惡の僧侶が、佛陀の本旨を誤解して人生を輕賤するぞと云ふことを説いてある、惡世中比丘、邪智心誦曲、乃至自謂修行、眞道一輕

## 學ぶべし政治家は

(白碧)

近來、日蓮上人に對して野心多き政治家にてありしなりとの妄評を讀むものがある、それ上人の猛烈なる折伏運動が、常に時事問題に關聯して居るからであると云つて居るさうして之を新発見でもあるかの様に得意がつて居る、けれども政治は政治家の獨占の業務であつて、國の風教を支配すべき宗教家の干與し得べきものでないとするならば、之等は未だ政治の性質をも知らざるものである、政治は如何なる階級種類を問はずして國民の凡てが交渉を持つて居る、上人は日本國民である、ことに國民性を遺憾なく發揮せられたる模範人格であつて、確かに廣義の大政治家である、充實豐富なる政治的思想を以て、國家の上に起る重大問題に就て、根本理論的政策を擧行せられたのである、言ふまでもなく今日の所謂政治家ではない、上人の一代における奮闘史は、國家の根本基礎を確立して之を實現せんとするにある、故に一國の秩序を正すせんがために大義名分を唱へ、尙當年の似非政治家に痛撃を加へて顔色なからしめたのである、歴史を讀むものは北條を反打するものも無理はない、日本宗教史中一人もないから驚くのであらう、さりながら、法と國との理想に契合して國民の歸一は明瞭となり、一國の政治は、健全なる宗教的思想に訓練せらるる所に、政治の本義は實現し得るのである、新しくして人心を指導するそれが、日蓮主義の各宗教に卓越せりと誇り得る所以である、この思想の身讀者たる上人が、政治上の問題を解決して適切な啓導を與ふるは、天來の特權に於てまた上人の慈悲發現である、政治家とは自己の利害を超越して國家人生を指導する慈悲心と活動とを要する、慈悲心なきものは政治家でない、今の所謂政治家は、先づ須らく上人によりて政治の思想及び其本領を會得することが大事であると信ずる

## 賤人間一者 (法華經勸持品)

人生を輕賤するは惡世の中の邪智の比丘の説く所である、佛陀の本旨は人生を輕視して徒らに未來觀にのみ傾いたものではない、但世人が此人生に何等の理想を有せずして、醉生夢死するを憫んで、此人生に意義を與へ理想を加へて、高尚なる生活を營ましめんとせられたるが佛陀の御教である、故に佛陀の御教は人生に最も深き關係を有するものであつて、若し人生を離れては佛陀の御教は存在し得ないものと言はねばならぬ、然るに誤れる佛弟子等の、徒らに人生を輕視し悲觀し人生を離れて淨土を説き證悟を語り以つて高遠なりと誇るが如きは、佛弟子の假面を被れる外道と言はねばならぬと思ふ、日蓮上人が念佛無間禪天魔と喝破せら

れたる眞意義は正しく此點に存するのである

## 二、佛教と道德

斯様な譯であるから、佛陀の御教は人倫の向上發展に其全力を盡され居る、然るに門外者は一般に佛教の道德を目して、勿れ主義の道德である、消極的のものであると見て居る、これは佛教の全體を見ないで、一部分のみを見て佛教全體を知れりとする短見者流の説に過ぎないが斯る説が盛んに主張せられて居るのは吾人は意外に感ずる位である、佛教を人生己外に超越したるものと見て行く頭から考へると、そう云ふ風に見へるのであらう、けれども、前に申す通り、これが佛陀の興世の眞意でもなければ、佛教の教説でもない、佛陀が五戒を説き、八齋戒を説き給ひしも、皆人倫道德を基礎として説き給ふたので、道德を無視し人倫を輕ろんじて説き給ふたのでは無い、此點に就ては、世人は佛教に對して今少し眞面目に研究して貰いたいと思ふ、世間有識の人の間に耶蘇教と佛教とを比較して、教理の如何は何とも云へぬが、表面に現はれた道德上

の事で見ると、耶蘇教の方は社會的道德の方面に感化を有して西洋では公德が發達して居る、佛教は其方面に缺陷がある筈と云ふて居る人もあるが、佛教でも決して社會的道德を輕視して居るものではない、佛教で言ふ戒律威儀の中に、今日社會で云ふ公德杯の事は十二分に説いてある、之れを社會に應用しなかつたのは佛教の咎ではない、人の罪である、これを説く人があつても注意しないのは社會の罪である、反省せねばならぬことである

## 三、家庭道德

今佛教に於ける道德に關する方面を一二御話致して見やうと思ふ、最も手近かな所を訓誡せられて居るのは六方禮經である、此は親子、師弟、夫婦、親屬朋友、主従、沙門の關係に就て一々其心得を示されて居るのであつて、佛教が如何に些細な點にまで注意を拂ふて居るかが分るのである、此經は、佛在世に王舍城内の長者の子に善生と云ふがあつた、毎朝沐浴して東西南北上下の六方を禮拜する、佛はこれを見られて汝は何

が故に斯る事を爲すのであると問はれた、時に善生は自分は何の爲めに六方を禮拜するか知らぬ、祖父の遺命であるに依つて、之を守つて居るのであると答へたそこで佛は汝の父が汝をして六方を禮せしむるは身を以てせしむるにあらず、但形式に六方を禮せしむるのではない、精神的に其心得が必要であると云ふて詳細に其心得方を御説になつたのが此經である、家庭に於ける訓誡として最も適切なるものである、其大要を左に陳べやう、心得方が箇條書きになつて居るし、別に六ヶ數文字はないから解釋は略して箇條丈列ねて置きませす

## 1 親子の關係

子として父母に事ふるに五事

- 一、當さに生を治むることを念ふべし
- 二、早く起きて奴婢に勅令し時に飯食を作らしむ
- 三、父母の憂を益さすべし
- 四、當さに父母の恩を念ふべし
- 五、父母の疾病には恐懼して醫師を求めて之を治せ

しむべし

父母として子を視るに五事

- 一、當に惡を去り善に就かしめんことを念ふべし
- 二、當さに經書疏を教ふべし
- 三、當さに經戒を持つことを教ふべし
- 四、當さに早く爲めに婦を娶るべし
- 五、家中の所有當さに之を給與すべし

## 2 師弟の關係

弟子として師に事ふるに當さに五事あるべし

- 一、當さに敬款けべし
  - 二、當さに其恩を思ふべし
  - 三、教ふる所之に隨へ
  - 四、思念厭かず
  - 五、當さに後より之を稱譽すべし
- 師として弟子に教ふるに亦五事あり
- 一、當さに疾く知らしむべし
  - 二、當さに他人の弟子に勝らしむべし
  - 三、知りて忘れざらしめんと欲す

- 四、諸の疑難は悉く爲めに之を解説す
- 五、弟子の智慧をして師に勝らしめんと欲す

### 3 夫婦の關係

婦の夫に事ふるに五事あり

- 一、夫外より來らば當に起つて之を迎ふべし
- 二、夫出てて在らざれば當に炊蒸掃除して之を待つべし

- 三、外に淫心あることを得ざれ、夫罵り言ふも還りて罵り色を作すことを得ざれ、

- 四、當さに夫と教誡を用ふべし、有らぬ物什物を藏匿することを得ざれ

- 五、夫休息すれば蓋藏して乃ち臥することを得

- 夫として婦を観る亦五事あり
- 一、出入當に妻を敬すべし

- 二、之に飯せしめ、時節を以て衣服を給す

- 三、當さに金銀珠璣を給與すべし
- 四、家中の所有多少悉く用ひて之を分付すべし
- 五、外に於て邪きに傳御(妾)を蓄ふることを得ざれ

### 4 親屬朋友の關係

人親屬朋友を視るに當さに五事あるべし

- 一、之が惡を作すを見ては私かに屏處に往きて諫曉呵止すべし

- 二、急あらば當に奔り趨きて之に救護すべし

- 三、私語あらば他人の爲めに之を説くことを得ざれ

- 四、當さに相敬愛すべし
- 五、所有の好物當に多少之を分與すべし

### 5 主従の關係

大夫主人として奴客婢使を視るに亦五事あり

- 一、當さに時を以て食せしめ衣被を與ふべし
- 二、病覆には當に醫を呼びて之を治せしむべし
- 三、妄りに之を搗搗することを得ざれ

- 四、私の財物あらば之を奪ふことを得ざれ

- 五、分付の物は當に平等ならしむべし

- 奴客婢使の大夫に事ふる亦五事あり
- 一、早く起きて大夫をして呼ばしむること勿れ
- 二、當さに作すべき所自ら心をを用ひて之を爲すべ

- 三、當さに大夫の物を愛惜して乞丐の人に棄捐することを得ざれ

- 四、大夫の出入には當さに之を送迎すべし

- 五、當さに大夫の善を稱譽すべし其意を説くことを得ざれ

### 6 對沙門の關係

人の沙門道士に事ふる當さに五事を用ふべし

- 一、善心を以つて之に向へ
- 二、好言を擇びて與に語れ

- 三、身を以つて之を敬せよ
- 四、當さに之を懇慕すべし

- 五、沙門道士は人中の雄なり當さに恭敬承事して度世の事を問ふべし

沙門道士は當さに六意を以つて凡民を視るべし

- 一、之に布施を教へて自ら慳貪なることを得ざれ
- 二、之に持戒を教へて自ら犯すことを得ざれ
- 三、之に忍辱を教へて自ら悲怒することを得ざれ

- 四、之に禮進を教へて自ら懈怠なることを得ざれ
  - 五、之に一心を教へて自ら放意なることを得ざれ
  - 六、之に點智を教へて自ら愚痴となることを得ざれ
- 以上の訓誡は日常吾人の周圍に起る問題に就いて其心得方を教へられたものである、此に示されてある一々を吾人が遵守したならば其道德的行爲の如何に向ふかは想像に餘りあることと思ふ、此點より見ても佛敎が人生に直接の敎を垂れて居ることは明白であらうと思ひます、

人間生存の上には戰は己み難き必然の結論ならずや、世には一も二もなく平和なれと云ふものもあるも、絶對の平和なるものは人間界には望むべきことにあらず、人間相互の間には生存の競争があり、從て戰鬪は開始せられて勝敗を決せずんば自己保存を全ふすることを得ざるもの也、吾等がつねに思想問題に力を致すも、亦是れ一種の戰也、戰なる哉

求道の人北海の某友に復するの書

於伊豫之客舎 影山 謙 二

拜復、貴札被示候「道に入るは只々信仰の一にあり、信仰は研究すべきものなるに無之、研究はやがて迷路に入るの階段にて五里霧中に彷徨するのみなることも宜く、存居候も、幸か不幸か、なまじか教育を受けし身の、つい知りつゝも學究的の迷路に兎に角進み難なる、なまじかの學問は、信仰と云ふことに向つては、害ありて益なきことつく、相惑じ申候」とは、實に是れ當代現下に横溢せる苦悶の叫喚にて候、日夕道を求むる者、或は求めて得ざるもの、或は求めて得ず候に入り得ざるもの、蒙前に尊兄のみならんやにて候、之れぞ洵に末法濁世の有様にて有之候貴説御尋の小学生の如きは、賄して顧るに幸に幼少の時、両親の膝邊に侍せるの日、不知不識、父母と共に俱に本尊のみ前に合掌唱題禮拜の習慣と疑ふに訓育せられしが、而し漸く長ずるに及ては、兄の所謂「教育」てふものを學校に受くるに及びて、一時は全く無信仰の者と爲り了りきも後ち又本化の智識諸君の信解談を聴くに及ては、又復舊習幼少の時の如くに、信仰を容易に復活することを得て候ひつゝ、由來明治初頭以來の歐風的教育は、單に知育強育意育の三育を謂へども信仰を云はず、隨て人に信仰の尊き氣節を種へざるは又已むなき事にて候へく候

今の世に於て、所詮信仰教育の一義門は、家庭に於て父母たる者が各其子女に對して、日夕、身口意の三業に涉りて調陶化するの外なるべく相覺へ申候。信仰なき家庭、信仰を缺ける學校、信仰の貫通せざる社會、道の氣運の風、自然的化育のまに、成人せし人々が、卒として猝かに威儀整嚴なる信仰に入り難きは情理當然の事とや可申にて候。時代が餘りに學校教育てふものに重きを置過ぎたる結果、其反動として信仰の水に溺したる人々の煩悶苦悶は、今や將に其極に達せんとする有様にて候之候。さたり、去ればにや、家庭に育ちしと云ふなる吾人（尊兄の如き又小生の如き）も、今は正に是れ、各々家庭に於て我子女を育つ

べき現下に當面の責任者と成りたることを、我と我身に深く自覺すると同時に、夫れを思ひ之を念ふに付けて、子女に對する信仰教育の爲に遂に宗教の選擇を遂げて、子女直接の爲め、乃至子々孫々の爲めにも、勝手たる信仰を家傳的に與定すべき必要に迫られつゝあることを自覺せんばあるべからずと存申候。信仰ある家庭に成育せし子女は、やがて長するに及て、又信仰ある家庭を造るべく、世々代々、新しくしては始末て無宗教の惡狀態より反撥して、宗教的に整美なる社會を出現するに至るべしと存候。

故に、子女をして知情意の三育を學校に於て學習せざる父母は、同時に家庭に於て信仰の補習を興ふるの心得こそあらまほしき事に存申候。新かれば則ち、之れやがて、得て理想に庶幾き人物養成法とも可申にて候はずや、而して又之れ、現時社會の覺醒の前路に起てる吾々の義務とも存申候。

智者學匠と成りても地獄に墮て何の詮があるとは、是れ聖祖金口の明露に候ぞ、然るに貴札に示されて候「聖日蓮の人格、謙、は聞くにつれ心むに従ひて、益々其偉大を加へて敬愼するの一點は、決して並々の人にはよも劣らぬ積りに候、而かし日蓮の弟子として同化する迄の處には未に至り不申候」ア、兄よ、夫れ「有解有信」は舍利弗迦葉菩薩等の位「有解無信」は進多菩薩外道一輩の事、無解有信は樂利ならぬ我等が分と思ひなぞらへてこそ、信仰の尊きが上にも尊きを覺へ候もかな。兄よ、第一則も早く信仰に入り給へ、所詮信仰なき者が、なまじい批判的研究てふことは、佛祖の道いやが上にも深遠高大なるに比して、現代的吾れ等が知識の餘りに短見淺劣なる、強いて之を物に譬へんか、夫れ或は、猿が論語を聽いて人道を教ふにも似たりや、非耶。

法華經に云く「一心見佛、不自惜身命」と、聖祖亦宜はく「獅子王の如くなる心を持てる者必らず佛に成るべし」と又宜はく「聖も惜まず所無妙法蓮經」と唱させ給へ」と、夫れ本化の信仰は絶大の勇猛心より起すに在り、勇に在り、斷に在り、痴疑迷過は本化の宗風に秀らず、起つて兄よ速に起て、尙ほ筆紙の及ばざるを補ふ爲め、別紙に開目抄、聖嚴問答抄、上野抄の各要章を謄寫して參らせ候、よく、御覽慈讀祈致度候。 志々謙言



活動史

東京

▲労働者慰安會、七月十六日職工徒弟の爲に慰安會を統一閣に開いた時刻には七百餘の來會あり開會を宜するや少年の劍舞數番と柳家小三治の滑稽なる落語に次て東家樂松及び小樂遊の浪花節があつて後佐藤海軍少將の神聖なる労働に勵むべき所以を懇説して無量の調化を興へた

▲十九日の日曜講演には高木井村兩師の講話ありて感動を興いた

▲地明會、二十六日例會を統一閣に開いた井村師の信仰力と救済力との關係に就て詳細なる法話あり柴田一能師は日蓮上人と婦人との關係に就て痛切なる訓話をなし本多大僧正は婦人の本質より説き起して其本分を示し家庭における全權は婦人に存するを述べ修養の必

要なる所以を教へられたので一般聴衆は深く心肝に染みて感じ入るもの多かつた

▲東京に於ける各寺院の施餓鬼法要には講演を開いて心靈上の救済を行ふた

△本化記者團八月二日統一閣に講演會を開き三上師の熱烈なる辯論ありたる後鹽出布教主幹は佛教の本旨は山林より都市へと進み來りて人生活と交渉すべき所以を説き加藤日宗新報主幹は兩重父子の意義より日蓮上人の尊信すべき所以を詳説し幹事の閉會挨拶ありて講演を終り午後六時より淺草廣小路松田樓にて晚餐會を開き加藤文雄石田顯隆高鍋天統鹽出孝潤三上義徹諸氏卓を圍んで教界の時事を論じ華正の氣焔を擧ぐるに決し和氣洋々の裡に散會したるが次回は九月六日午後一時より日本橋身延別院に講演會を開催する事に決した

△白山會 八月一日午後七時小石川白山前町同會本部に開く三上義

徹師の人間の爲せし仕事は永久に亡ぶるものにあらざる所以を説き深き印象を興へて十時會を閉ぢた

△大道會 八月八日午後七時小石川原町本念寺に開き大森体勇師の信仰と家庭との効果に就て講話あり三上義徹師は日蓮上人の少年時代を語りて奮勵の志氣を作興し餘興には落語尺八福引などありて盛會なりき

△法國會 牛込原町久成寺の同會は八月九日午後一時より開會大森師の講演後三上師の修養訓話ありたり

△宇都宮 宇都宮安國會は熱心なる鑽仰者の運動によりて漸次發展の氣運を呈し講演を開催するごとに求道の士女多きを加ふるに至りしが七月十八十九の兩日第五面定期例會を開き統一主幹三上義徹師を聘したり十八日午後一時朽木縣立農學校に於て同校同窓部の招待により麥倉幹事先導にて人格の修養三上義徹二時間の講演を試み何等かの印象を興へ終て

山崎校長の案内にて教室及試験所等を參觀し同校へ統一及「日蓮上人」を贈呈せり次に十九日午前中歩兵第六十六聯隊に至り山崎大尉佐藤大尉の案内にて同隊大營庭にて全員を集合して「思想の訓練」三上義徹師思想の分立は軍隊の禁物なりと前提し幾万の將卒も悉く御國のために忠誠を捧ぐべく訓練すべしと説き示し一時間半の講話に趣味を加へて論辯を振はれたればいと静慮に傾聴し居たりき將校集會所にて教育係山崎大尉の接待にて茶菓の響應あり日蓮上人の人格に付て其所感語り管門を退出したるは午砲の鳴れる時刻にてありしが同日午後一時公開講演會を商業會議所に開き交會幹事開會を宜し野村晃人氏は日蓮主義に歸依せし所以を述べて偉大なる人格を紹介して靈感喚び起し次に「現代と日蓮主義」三上義徹師此日の來會の重なるは師團高級副官津田少佐等の將校佐藤女學校校長山本女子師範主事其他の教員實業家等二百

餘名の聴衆ありて炎熱焼くが如きにも拘はらず熱心に傾聴して居つたのを見る同市における日蓮主義の勃興は他の凡ての團體を壓するの概ありて盛會なりと云ふ  
△なほ同會は八月七日同市公園馬場町安國會事務所傍の齊藤金次郎氏所有の家にて通俗講演を開き佐藤豊次郎氏開會を宣し野村晃人氏の道徳の制裁に就て交會竹次郎氏信仰的生活を述べ田中省三氏は苦樂の徹底生活を論じて多大の感化を與へたり亦交會氏は同市學生俱樂部に向て主義宣傳に努めつゝありと云ふ

**京都**

暑さの爲めに其の職分を怠る様では自からの價直を否定するものである我徒は不斷の奮闘を續けて居る  
七月一日 妙滿寺に國橋會を修し三「好信道師信仰の要義」を語たり七日午後八時より京都天晴會例會を妙滿寺に開き「川崎幹事開會」を宣し「野口日主師は處世の要義」を詳述して日蓮主義との關係を述

べ眞に好箇の清涼劑なりき十日午後一時川東本正寺に婦人會を開き「金光師婦人の修養に就て」の續講をなす十三日午後一時妙滿寺に宗祖御報恩會を修し「金光師世法と佛法」の關係を説き十五日千本壽量寺に例會演説を修し「石井師恩に就て」前講を補説し「金光師日蓮主義の信仰に就て」其特長を各面に向つて説明し十八日午前妙滿寺に照憲皇太后尊儀の百日祭法要を修行し同夜例會演説を開催し石井師人生の幸福は結歸を健全なる信仰にありと結び銀井師理想と現實の調和せる宗教として日蓮主義の特長を述べ金光師現代の信仰狀態に就て其缺陷を指摘して日蓮主義の信仰を詳説し廿八日午前妙滿寺に於て明治天皇尊儀の第二周年御法會を謹修せり

向京都學生日蓮研究會は幹事武田顯龍氏外二名三高を卒業し東京帝大に入學せしを以て其送別茶話會を妙滿寺に開き互に胸襟を開き信仰を語り更に新學期よりの會の發

展等の協議をなし常任講師には川崎英照師法華講義の續講をなし時々名士を聘して講演を聴くべしと云ふ

◎京都府下何鹿加佐兩郡の日蓮門下各寺院聯合信行會主催にて七月二十六日を以て京都線阪鶴線通以來の犠死並に工事非業の死を遂げたる亡靈の爲めに綾部舞鶴新舞鶴の三驛構内に於て大施餓鬼法會を執行したり各死亡者の遺族は勿論各郡長町村長各驛長等來賓の參拜並に各寺の檀信徒等多數の參詣者ありて法益多大なりしと云ふ

**大阪**

教界の戦線甚だ廣きが爲めに少數の戦士にては突撃を試むること至難なるも日蓮主義の將來は僅か一人なりとも戰はては已むべきでない近時大阪教界の振ひ起れるはげに芽出度とにこそ

七月十二日夜八時より生玉前町堂關寺に講演を開き「生存の意義」田顯正「道徳の根底京華應」感恩の生活吉永義彦「光と力梶木日

種」の熱心なる講話ありたり七月十三日午後八時西高津中寺町蓮成寺に例會を催ふしたり「日蓮上人の主張京華應」信仰の目的を確立せよ川崎英照「理想的成立宗教梶木日種」七月十六日午後二時蓮成寺にて明治天皇御二周年祭並に照憲皇太后御百日祭奉悼會を嚴修し終て左の講演あり「知法恩國梶木日種」の日蓮主義より見たる法

**房總**

七月三十日午後三時明治天皇第三回御忌に相當するを以て茂原町在山根滿藏寺に於て道場を淨め莊嚴を盡し種々の供物を捧げ以て追善の大法要を嚴修し了りて後に奉悼の講演會を開き「開會之辭大川日教」國民之元氣河野見中「明治天皇と國民の責務國分顯有」不滅の信仰渡邊乾航「師等の明治天皇の御一代に於ける盛徳を述へ聴衆に満足を與へたりと云ふ

七月廿四日道路布教隊は本泰寺堂前に整列し化導成辨を祈誓し一同聖語奉讀唱題數刻先導の玄題旣一旋(平岡師)に聖語旗四旋(田中三浦山口田限の四君)と中原出海の兩師等は寺門を出て旗數々日蓮主義を標榜して市内數ヶ所の街頭に立つて師々吼勇ましく米城の人士に向ふ所があつた田中三浦出海中原諸氏が熱烈なる主義の絶叫は一種云ふべからざる感動を與へたことと思ふ中には終始熱心に隨行して法を求めつゝあるものもあつた

**盛岡**

七月三十日午前十時明治天皇御尊儀參周年法要を奉修し後一時法話會を開き渡邊日研富田小一郎氏の講話ありて教益を布きたりと云ふ

**九州**

久留米市德教正信會は七月廿五日より三日間に亘り臨時大會を催し本泰寺内に於て日蓮主義演説會を開いた尙ほ付屬事業として道路布教をも試みたとの事である

七月廿四日道路布教隊は本泰寺堂前に整列し化導成辨を祈誓し一同聖語奉讀唱題數刻先導の玄題旣一旋(平岡師)に聖語旗四旋(田中三浦山口田限の四君)と中原出海の兩師等は寺門を出て旗數々日蓮主義を標榜して市内數ヶ所の街頭に立つて師々吼勇ましく米城の人士に向ふ所があつた田中三浦出海中原諸氏が熱烈なる主義の絶叫は一種云ふべからざる感動を與へたことと思ふ中には終始熱心に隨行して法を求めつゝあるものもあつた

七月二十五日午後七時より本泰寺  
 本堂に於て左の如く講演を開かれ  
 「眞理の曙光を見ずや田中盛枝」  
 「因はれたる思想針貝傳五郎」一所  
 成三浦源太郎「勇猛精進末永伍  
 平」心浄柔頼出海俊義「活け  
 七月二十六日午後七時より「活け  
 現狀に鑑み主我中原通應」帝國の  
 六聯隊長加藤豊三郎「日蓮上人の  
 罪の有無末永伍平」日蓮上人の  
 悲（其一）藤本日照七月二十七日  
 午後七時より日蓮上人の國家觀  
 中盛枝「日蓮上人の慈悲（其二）藤本日  
 照」以上諸氏の熱心なる態度と有  
 益なる講演はいつも満堂の聴衆に  
 歡迎せられたる尚ほ今回の催しに就  
 ては同寺總代諸氏が大に外護の任  
 當られてこの淨業に資せられ將  
 來の發展光揚を希されて居る由  
 ◎福岡縣三池郡二川村木渡瀬新興  
 寺に於ける説教は七月五日開催し  
 出海師は信徒の心得べきことと説  
 き七月八日は郡内東渡施村青年同  
 志會大會に於て信仰なきものは自  
 己を忘るゝものなりと示し  
 七月十四日は大牟田町横須久保田  
 利作方に通俗佛教幻燈講演會を催  
 りし盛會の中に多大の訓化を與へた



**日宗法衣専門**  
**青雲帽 希教服 袴**  
 此外法衣付屬品一切

京都佛具屋町五条  
**飯田法衣店**  
 振替大阪六八四七

實用 向 居士衣 金九圓也  
 實用 中 及四類 金拾圓八十錢  
 無半 建 本衣 金八圓也  
 新製 品 布教服

最上々黒アルハカ地  
 布教服 金五圓參拾錢

△海軍大學における本多大僧正の講演

▲精神の修養 (各一部金貳拾錢郵税金六錢)  
 ▲思想の調整

△軍事教育會にて發行したるもの之を世の讀者に頒布せん  
 ▲天晴會講演錄 (紙數六百餘頁(洋裝) 一部郵稅共金貳圓十二錢)  
 本多大僧正著

▲法華經講義 (一部金參圓郵税金十六錢)  
 ▲橘香集 (一部紙製金十錢郵稅二錢)

炎熱燒くが如く御座候處益々御清祥慶賀此の事に候降て弊店御愛顧  
 に報ゆべく誠實を以て營業致居候へば何分とも御引立被成下候様奉  
 懇願候

京都三條通烏丸東入  
**本店 草木伊助**  
 東京淺草三好町二  
**出張店 草木伊助**  
 (電話上七三五番)  
 (振替東京二二五五九番)  
 (電話下谷三四三四番)  
 (振替東京二二五六八番)

▲如何なる御誂にても品質を精選して迅速仕立候上御届可申候

▲購讀料未拂者に告ぐ  
 △七月號に購讀料御拂込方相願置候處未だ御送金無之  
 方も有之整理上當惑候のみならず經營上にも多大の  
 困難相來し候次第に候故八月までの料金は本號發  
 送と同時に集金郵便に托し候間御拂込被下様相願候  
 尙ほ數年間未拂にして集金郵便を拒絶せし方も昨年  
 末に有之候も其は實に道義上遺憾と存ずる所に候

統一會計係

毎月一回十五日發行、一部金六錢 郵稅五厘 一ヶ年金七拾八  
 錢代金へ振替貯金口座東京二八八四〇番へ拂込マレタシ此場合  
 ニハ送料ノ外ニ金壹錢ヲ添付前金ナラザレバ發送セズ

大正三年八月十五日印刷發行

發行人 東京市小石川區白山前町十七番地 三上義敬  
 編輯人 山根日東  
 印刷人 鈴木日東

發行所 統一團  
 東京市淺草區北清島町十四番地  
 (電話下谷六千三百十番)

所 込 申  
 地番七十町青山白川石小京東  
 徹 義 上 三  
 (番〇四八八二京東産：替振)

# 第六次夏季講習會公告

一、會場 相州片瀨 龍口寺  
 九月一日より七日迄一週間  
 二、會期 每日午前八時より十一時迄、午後四時より六時迄 但時宜に依り變更する事あるべし  
 三、會費 僧俗男女を問はず會員章所持の者  
 四、會費 金壹圓(臨時聽講希望の方は一日毎に金廿錢) 但學生及び軍人に限り半減の事  
 五、會中、交名茶話會、靈蹟巡拜會、公開講演會、有志懇現會等を催ふす  
 六、泊味 片瀨及び江之島に指定旅館あり、一泊金五拾錢、晝辨當金拾貳錢、龍口寺内宿泊者は一日賄料金五拾錢以内  
 七、交通 東海道線藤澤驛又は横須賀線鎌倉驛にて下車夫より片瀨迄電車の便あり  
 八、南無妙法蓮華經 權僧正 井村日  
 九、奮闘主義 商船學校長 石橋日  
 十、日蓮主義の使命 大軍僧正 本多日  
 十一、鎌倉の役と日蓮上人 陸軍少將 小原日  
 十二、未定 權大僧正 山田日  
 十三、宗教と國家及政治 法學博士 松田日  
 十四、日蓮主義の感化事業 東京感化院長 小松日  
 十五、最近思潮と日蓮主義 文學博士 小林日  
 十六、人法一如 文學博士 姉崎日  
 十七、未定 文學博士 箕作日  
 十八、顯密判の大要 唯佛敎團長 清水日  
 十九、リチャード博士の法華經觀 慶應大學教授 山田日  
 二十、日蓮上人の背景 文學士 柴田日

## 講師及講題

(順はろい)

# 軍國民の精神修養

大僧正 本多日生

號月九

號五十三百二第

# 統一

大日本帝國と日蓮上人

唯一佛敎團長 清水梁山

## 戦と死

三上義徹

賴春水の人格

記者

林將軍を喪ふ

記者

# 近代文明と帝國の天職

文學博士 姉崎正治